ビブリオトークの新しい可能性を探る

―「ビブリオ漫談」の実践を通して―

笹　倉　　剛

New Possibilities for Biblio Talk: Biblio Monologue and its Practice

Tsuyoshi SASAKURA

要　旨

本稿では、ビブリオトークの新しい技法として、「ビブリオ漫談」という読書技法を考案し、それを実践した結果について考察をすすめていくこととする。「ビブリオ漫談」とは、本の紹介をするときに漫談の形式を採り入れて、聞き手に楽しく面白いと感じさせることで、その本を手にとってみたいと思わせる読書技法である。その「ビブリオ漫談」とは何か、その良さはどのようなところにあるのかを詳しく紹介していく。さらに、「ビブリオ漫談」のいくつかの実践的で具体的な事例から、様々な考察をすすめていく。

また、これまでに行ってきたビブリオトークをどのようにすすめていけばよいのかについても触れている。特に、漫談形式であるから、「笑い」や「ユーモア」の要素を採り入れることで何がどのように変わっていくのかを明らかにしていきたい。このような点については、まだ実践し始めたところであるから、十分な検証はできていないが、その点についても今後深めていきたい。

最後に、「ビブリオ漫談」について、今後の課題と可能性について述べる。

キーワード：ビブリオトーク、漫談、笑い、ユーモア、読書技法

はじめに

これまでビブリオトークについて様々な視点で取り組んできた。それは、ビブリオトークが子どもたちの読書嫌いに大きな効果をもたらすという成果が少しずつ現れてきたからである。特に現代では、本が好きな子どもとそうでない子どもの二極化であると言われている。それだけに、読書嫌いの子どもにとって本の世界に入るきっかけづくりが大切になってくる。もともと本が好きな子どもは「読書は楽しい」という意識があるから、読書そのものも苦にならない。それに比べて、本が嫌いな子どもは読書と聞くと、つまらないもので苦行としか捉えていないところがある。そういう意味では本嫌いな子どもをどのように読書へと誘うかが大きな課題となってくる。そのためには、読書が楽しくて面白いという実感や体験をさせていく必要性がある。

そこで考え出したのが、本の紹介におもしろさやユニークさだけでなく、「笑い」や「ユーモア」の要素を採り入れるとどのようになるかということであった。これまで本の紹介をしてもらっても、本嫌いの子どもは最初から抵抗感があったが、この「笑い」や「ユーモア」の要素が加われば、本嫌いの子どもにとっても本に対する敷居が低くなり、本を手に取りやすい状況が見られた。さらに、この「ビブリオ漫談」を採り入れることで、本嫌いな子どもにとって、本が少しでも楽しいものであるという意識が芽生えてきたら、次の読書へのステップに入れるように考えられる。

では、「ビブリオ漫談」の実践と考察について述べていきたい。

1　「ビブリオ漫談」について

（1）ビブリオトークとは

これまでにビブリオトークについては、『グループでもできるビブリオトーク』『テーマ別のビブリオトーク』『岩波少年文庫のビブリオトーク』『読み聞かせを活用したビブリオトーク』『ビブリオクイズ』（以上、あいり出版）の5冊の本をまとめることができた。[1)～5)]

以上の本で述べているように、ビブリオトークでは様々な手法を用いて本の

紹介ができる良さを含んでいる。例えば１冊の本を、１人で紹介したり、２、３人で紹介したりすることもできる。そしてテーマを決めて、ブックトークのような本の紹介ができたり、本の中の著者の言葉を引用して本の紹介をしたり、本の内容についてクイズ形式にしたりするなど、実に多様な本の紹介方法を秘めている。

このようなビブリオトークの実践をさらに進めていくために、本稿では「笑い」や「ユーモア」の要素を採り入れた「ビブリオ漫談」という読書技法を考案した。まだ、実践については昨年度からはじめたのであまり事例が少ないのが実態であるが、二つの大学で実践した結果、学生の反応もとても好評であった。その成果を踏まえて、これまでの「ビブリオ漫談」の実践をまとめることで、これからの取組につなげていきたいと考えている。

まず「ビブリオ漫談」について述べる前に、ビブリオトークとは何かについて触れておきたい。(p.11)[1)]

①１人または数人で本を紹介する技法

②本を紹介するときには、作品や作家に対して敬意を払うこと

③発表時感は３分から５分程度で実施する（小学生は３分または４分でもよい）

④読んだ本のあらすじや感想を時間内で述べる。ブックトークのような客観的な感想だけでなく、主観的な感想も入れてよい。（ここがブックトークと違うところ）

⑤本を紹介した後、読んでみたい（買いたい）本の人数を調査（挙手または記述形式で調査）

⑥本を紹介した後で、紹介者の本を読んでみたい者が集まり、質問の時間をとってもよい

以上がビブリオトークの定義である。

（２）「ビブリオ漫談」とは

「ビブリオ漫談」は、あくまでもビブリオトークの中の一つのパターンである。

ここで「ビブリオ漫談」について、どのようなものであるかを述べておきたい。あくまでもこの実践は著者自身が考えたものであるが、数年前から大阪市立中央図書館で実施されていた「書評漫談」を参考にさせていただいた。

①ビブリオトークの定義を踏まえて実践する

②二人一組になり、一冊の本について紹介する（三人が一組になってもよい）
※１人で実践してもよい。

③二人が楽しい「笑い」や「ユーモア」を誘うような会話で本の紹介をすすめていく

④「笑い」や「ユーモア」をどのように演出するかを二人で工夫する（できるだけ不自然な笑いにならないように）

⑤本の紹介の最後も、「笑い」が「落ち」になるような工夫ができればよい

以上が「ビブリオ漫談」の概要であるが、①のようにあくまでもビブリオトークの一つの形式として採り入れたい。

②のグループ作りは、二人がもっともやりやすいと思われるが、３人で実施しても面白いと思われる。ただ、細かい打ち合わせなどが、より複雑になってくると思われる。また、１人の漫談のように、１人だけでできるということであれば、それも可能である。

③の二人（または三人）のかけあいは、笑いを誘うようなユーモア的な雰囲気が大切になってくる。「笑い」や「ユーモア」は大切であるが、気を付けなくてはいけないのは、相手の人間性や失敗を笑いに変えるような、自虐的な笑いはやってはいけない。あくまでも、聞く側が微笑ましいような笑いに心掛けるべきである。（※笑いの質を大切にする。）

④のシナリオの流れのチェック時に、笑いをどのように演出していくかをグループで十分に話し合う必要がある。いわゆる漫才師が行うように、ネタあわせと、笑いの箇所を慎重に工夫していく必要がある。また、「笑い」や「ユーモア」を意識し過ぎて本の紹介に影響を与えないことも大切である。

⑤は漫談や漫才で、最後に「落ち」をもってきて、そのお話を見事に締めくくる役割があるので、このことについても十分に話し合いたい。この最後の「落

ち」はとても重要で、お話をきれいに締めくくる役割もしている。

（3）「ビブリオ漫談」の「笑い」と「ユーモア」のよさについて

①「ビブリオ漫談」の「笑い」と「ユーモア」について

「ビブリオ漫談」を実践するときに、実践方法として考えたのは、誰でも楽しく本の紹介を聞けるようにすることであった。それにはある程度の娯楽的な要素、つまり「笑い」や「ユーモア」というセンスを採り入れてビブリオトークを実践してみようという試みを思いついた。そのことにより、本があまり好きでない子どもにとっても非常に聞きやすいものになるのではないか、ということであった。

最初は大学の学生による実践であったが、こちらが思っていた以上に、学生たちの反応は良く、本に対する興味と、その紹介したい本を読んでみたいという意見が数多く聞かれた。

ここで「ビブリオ漫談」の「笑い」や「ユーモア」センスについて興味深い論文があるので紹介したい。創価大学大学院紀要での矢島伸男氏による「『笑い』の教育的意義－『ユーモア・センス』の概念を中心に－」の論文によると、ユーモア・センスを次のように定義している。(p.208)[6)]

・発見力：ユーモアを発見し、理解する能力
・構成力：ユーモアからおかしみを見出し、表現するための内容を構成する能力
・表現力：自分が考えるユーモア的表現を的確に伝える力または笑いの認知を知らせる能力
・判断力：TPO に応じてユーモア的表現を用いる能力

以上、矢島氏が述べているように、ビブリオトークの「ビブリオ漫談」では、まず本を読んで、そのユーモア的な内容や出来事などに触れ、それを発見し、次にはそれをお話としておもしろおかしく話せるように構成す

る能力が求められる。しかもそれらのユーモア表現をどのように相手に伝えていくかを表現する力も求められてくる。

最後に、それぞれの発表の状況に応じてのユーモア的な対処に気を配ることも大切となってくる、いわゆる TPO が大切である。つまり「ビブリオ漫談」では、本を読んでそのユーモアを見出し、それをおもしろく表現できるように構成し、伝えていく力が大切になってくる。全体を通して、それぞれの場面でのユーモア的な表現が妥当であるかの判断力は常に問われてくるのである。

またアブナー・ジップは『ユーモア心理学』の中で、「笑い」「ユーモア」「ユーモア・センス」の 3 つの概念を階層的に分類し、次のように説明している。(序文　viii)[7)]

- 笑い：おかしみを感じる現象すべて（ここでは最上位の概念）
- ユーモア：この世すべてに潜在する笑いの要素（ここでは最下位の概念）
- ユーモア・センス：人間が笑い・ユーモアの効果を享受するための資質・能力。ユーモアを笑いへと変化させる媒介物。（ここでは中間の概念）

これを図式化すると下記のようになる。

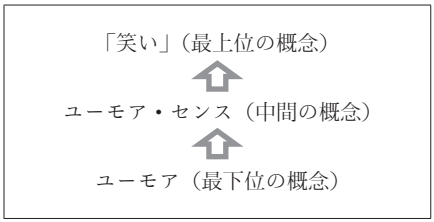

図 1

この図を参考に述べると、ビブリオトークで紹介しようとしている本を媒介として、誰しもが持っているユーモア感覚をユーモア・センスとして表現し、その表現されたことが「笑い」という結果につながってくると考えられる。

また、ベルグソンは『笑い』（岩波書店）の中で、「笑い」について次のように述べている。(pp.20-21)[8)]

…、或るおかしみの効果が或る原因から出て来るとき、その原因が自然的であると考えられれば考えられるだけ、その効果は我々にいよいよおかしみあるものに思われる。単純な一所為として人が示す放心を既に我々は笑うのである。それが我々の眼前で生まれ成長するのを見、その起原もわかっており、その来歴を再構成することもできる放心であったなら、それはなおのこと笑えるものであろう。…

ここで述べているのは、次のようなことである。

・笑いが自然的であればあるほど、おかしみが増すこと。
・単純なことであっても、人が示す放心を笑うのである。
・過去のことであっても、おかしみを再構成すれば笑えるのである。

このようにビブリオトークでも、自然な笑いを誘い、笑うことで心が放心状態になれば、それだけに本の内容に対する印象も深まっていくように考えられる。笑いの要素が同じような内容であっても、それを工夫したり再構成したりすることで、また新たな笑いを生み出せるのではないかとも述べている。

ここで述べている「放心」について、三省堂の大辞林（第 3 版）では次にように説明している。(p.2320)

①他の事に気をうばわれてぼんやりしていること。また、何も考えずにいること。
②心にかけないこと。安心。放念。放神。

この岩波書店の『笑い』でベルグソンが述べているように、ビブリオトークではその紹介する本が元になり、そこから笑いの要素が生まれてくる。聞き手には、その説明の流れからどうしてそれが笑いにつながっていくのかがわかりやすいものであることが大切となってくる。その工夫した結果、そのおかしさに気を取られ、心が放心状態になり、笑いを誘うのである。

聞き手にとっては、笑いの中で、その物語の本質や中身をもっと深く知りたくなったり続きを予想したりしていくには、やはりビブリオトークを集中して聞く必要がある。そのような集中して話を聞くという点で、「笑い」や「ユーモア」の要素はとても効果を発揮してくれると予想される。つまり「笑い」という放心状態が心も体もリラックスさせながら、紹介する本に対して読んでみようという期待や願望が高まっていくのではないだろうか。

このことは実施したアンケートからも、「とても楽しく面白く紹介されたので、作品をぜひ手にとって読んで見たい。」という意見が数多く見られた。

②「ビブリオ漫談」のよさについて

これまでのビブリオトークでも十分に充実して聞き手を引き付けることができたが、新たに「笑い」の要素を入れることで、今までに予想もしていなかったほど、本の紹介が盛り上がったと思われる。これまでのビブリオトークでは、「本の紹介」「著者について」「どうしてこの本を選んだか」「あらすじ」「おすすめのところ」というように、この流れに従って紹介していたが「ビブリオ漫談」では、そのような形式にとらわれずに、上記の内容について自由に話せるというよさがあった。それだけに最初から最後まで、漫談を聞くような感じで、終始飽きないビブリオトークとなっていった。

「笑い」の要素を盛り込むことで、参加者の感想にもあるように「ビブリオトークの時間が短く感じられた」という意見が多数見られた。

2 「ビブリオ漫談」の実践例

ここでは「ビブリオ漫談」についての実践を紹介しながら解説をしていくが、今回の実践では2人一組で、お話をかけあいしながら本を紹介していくようにした。つまり一般に行われている漫談（漫才）のような形式と考えてもらってよい。では、ここでは5つの「ビブリオ漫談」の実践について紹介する。

（1）実践例Ⅰ：『残像に口紅を』筒井康隆　作、中央公論社[9)]

A：今回紹介する本は、『残像に口紅を』という小説です。

この本は、なんと、日本語が一音ずつ消えていきます。どういうことか。例えば、小説内では「もしも世界から『あ』が消えたら…」という一節が出てきます。すると、もう小説内では「あ」のつく文字が使えないわけです。「～である。」も使えないし「あなた」も使えないし「愛してる。」も言えないのです。

B：このルールは小説が進むたびにどんどん増えていくんですね。

A：そう！　『あ』も使えない、『ぱ』も使えない…。最後は『ん』だけが残ります。

B：その状況でも小説として成立しているんですよね。

A：（早口でまくしたてながら）そう！　みなさん！　凄いと思いませんか！　あぁ、すみません、僕がなぜこんなに興奮しているかというと、僕は中学時代からこの本の作者である筒井康隆の大ファンなんです。

筒井康隆の作品はほとんど読んできました。私の青春の一部といっても差し支えがありません。初期の短編SFなんかおもしろい作品がいっぱいありますし、主人公七瀬がテレパシーを使って様々な登場人物の内面を暴いていく七瀬シリーズもいいですし、あっ、みなさんが聞いたことのある『時をかける少女』、その作者もこの筒井康隆です。

筒井康隆は同志社大学の心理学部を卒業して、ショートショートの星新一、「日本沈没」の小松左京と共に「SF御三家」と言われています。まぁ現在ご存命なのは筒井さんしかいないわけなんですが。

神戸市垂水に居を構えていることもあって、神戸を舞台とした小説もあり

ます。

あぁ、えっと、それからそれから…。

B：…もしも世界から「あ」が消えたら…。

A：…おっ、なるほど…この私からも言葉を奪っていくつもりですね。よろしい、そちらのルールに乗りながら、ビブリオトークをしてみましょう。なんてったって私には筒井康隆に対する（ここで「あい（愛）」と言ってしまいそうになる）…強い気持ちがあるんですからね。さて、この作品は…。

B：「さ」禁止。あ、「さ」は言えないか。

A：えーっと、この小説は小説家の主人公がおもしろい小説を書こうとしてこのようなルールを小説内の主人公にかけていくんですね。つまり、メタというか、珍しいタイプの小説になります。

B：今日何時に起きた？

A：えっ、あさ7時…。あっ！　午前7時さんじゅう？　いや、半ですね。

B：「ね」禁止。あ、さ、ね。いやいや…。

A：えっ…と、この本はテレビ朝日…、えー「アメトーク」、もとい、毎週木曜深夜0：30に特定の人物・事柄の内容に関する芸人が集合し、…。

B：「み」「ぬ」「え」禁止。

A：それについて紹介やトークをするテレビ番組でメイプル超合金の…ツッコミの方に紹介され、話題になりました。

B：「ま」と「し」と「た」と「で」と「す」禁止。（あ、さ、ね、で、す、ま、し、た）

A：この本は古く、この本と同い年は、もう、28。よもや、この時代に話題になるとは、われ感激。

B：「や行」禁止。

A：聞いている人に一番感じてもらうことは、言葉というのは、こんなにも豊富なこと。

B：「を」、半濁音禁止。

A：一日に使う言葉はいろいろだが、普段、こんなに言葉に敏感になって言う

人はほとんどいない。もっと自分の言葉に注意を払うべきだ。…以上。どうだ!!

A：ありがとう、えーっと…サンキュー…、えっと、シェイシェイ…。

B：そこは普通でええねん。

A：あっそうなの、ありがとうございました。

＜この本の紹介について＞

『残像に口紅を』という筒井康隆の本は、このような「ビブリオ漫談」にとても向いているような印象を受けた。紹介する本が「ビブリオ漫談」に向いているかそうでないかも大きな要素となってくる。話術だけでも楽しく紹介できる良さもあるが、この本は内容的にもどんどん面白さにはまっていくところがある。

まず、言葉の「あ」から順番に言葉が使えないようになるとどうなるか。そういう制約を受けながら、言葉を選んで話すことの難しさを表現している。普段何気なく使っている言葉の「音」にはまったく意識しないで私たちは話しているが、言葉を構成する「音」がいかに重要なものであるかを気づかせてくれるという点でも興味深い小説である。また、その言葉を別の言葉で言い換えようとすると、そこにはその人自身の語彙力が問われることになる。

普段、自分の言葉に意識しない人が多いが、こういうような言葉の「音」というものを意識することで、改めて言葉、つまりボキャブラリーの大切さが意識されるのではないだろうか。

最後の「落ち」も工夫を入れながら、ビブリオトークを締めているのも見事であった。

今回のビブリオトークでは、終始笑いが絶えない本の紹介で、改めてこの本の魅力や面白さが伝わり、本書を読んでみたいという学生が多くいた。

（2）実践例Ⅱ：『ルドルフとイッパイアッテナ』，斉藤洋　作、講談社[10)]

A：今回紹介する本は、「ルドルフとイッパイアッテナ」という本です。この

本は2016年に講談社から発行されました。この本の著者はみなさんご存じの斉藤洋（ひろし）さんです。

B：誰ですか、それは。

A：こんな有名な児童文学者を聞いたことはありませんか。

B：すみません。はじめてです。

A：そうでしたか。

斉藤さんは、東京生まれの東京育ち。1986年にこの本で講談社児童文学新人賞を受賞してやんでぇ。

B：東京生まれだからって、江戸っ子で話さなくてもいいから。

A：斉藤さんは、この本のほかにも続編の『ルドルフと、もだちひとりだち』や…。

B：いや、『ルドルフ　ともだち　ひとりだち』で、区切るところを間違ってるよ。

A：ほかにも『しらぎつねまじるし』シリーズも書かれています。

B：いや、それはちがうよ。正しくは『白狐魔記（しらこまき）』シリーズだから。

A：なんでこの本を選んだのか、Bさんお願いします。

B：突然やな。去年の夏にアニメーション映画で映画化されていたんですけど、都合が合わなくて見られなかったの。そこで文庫本があったので読んでみようと思いました。実際読んでみるととてもいい話で、学校現場でも読み聞かせなどに使えそうだったので、ぜひみなさんに知ってもらいたいと取り上げました。

A：とても不純な動機ですね。

B：どこがやねん。早く本の紹介をしましょう。

A：この本は主人公のルドルフがひょんなことから東京の江戸川区へ行ってしまい、賢い野良猫イッパイアッテナに出会って二人でルドルフの故郷に帰る方法を探す物語です。

イッパイアッテナって名前の猫なんですよ。

B：変な名前ですね。なんでそんな名前なんですか？

A：ぼくの名前はなんですか？

B：山田君ですよね。

A：ぼくの名前はいっぱいあってな…。

B：え？　いっぱいあってなって名前だったんですか？

A：そうそう、ぼくの名前はイッパイアッテナ…。そんなばかな。

B：あー、そういうことか。ルドルフも同じようにそれを名前と間違えたんですね。

A：その通り。謎が解けたところで、もう少し詳しいあらすじを。

B：イッパイアッテナと出会ったルドルフは、一緒に行動し、野良猫生活を始めます。そんな生活の中で、金物屋の飼い猫、ブッチーと友達になったり、２匹で夏休み中の学校に忍び込んだり、町の人に餌をもらいに行ったり…。そんな中で、ルドルフはイッパイアッテナが人間の字を読むことができることを知ります。このことが、ルドルフが故郷に帰れるかどうかの大きなカギとなってくるのです。

A：デビルも大事じゃないですか？

B：たしかに。みんなから怖がられているブルドッグのデビルはこの物語でとても重要な存在です。

A：僕みたいに怖がられるキャラクターですよね。

B：そんなことないですよ。みんな優しい熊ぐらいに思ってますよ。

A：あ、熊と思われてるんだ。ショック！

B：優しいから熊でも大丈夫ですよ。

　デビルは八雲と違ってとても悪い奴なんです。

A：でも熊なんだ…。

B：そんなに落ち込まなくても。

　気を取り直して、この本の一番のおすすめのところを紹介しましょう。

　実際読んでみて、どこが一番よかったですか？

A：僕のおすすめはやっぱりイッパイアッテナの名言の数々です。彼は人間の文字を読み書きできる教養のある猫ですが、彼の発言には学校の教科書では教えてくれないような素敵な言葉がたくさんあります。その中でも特に感動した場面を紹介したいと思います。それはルドルフとイッパイアッテナが

様々な本を見ている場面のセリフです。(p.215の１行目～p.217の３行目を読み聞かせする。)

普段当たり前だと思っていることは、きっと大切なことなんだなとこれを読んで気づかされました。他にもいっぱい名言があるので実際に読んで確かめてみてほしいですね。

Ｂさんはどこがよかったですか？

Ｂ：私がよかったのは、やっぱり最後の場面ですかね。旅立つルドルフのためにイッパイアッテナがごちそうを用意しようとしたんですが、デビルがだましうちをし、イッパイアッテナが重症をおってしまうんです。そのあとのルドルフがかっこよくて。けがをしたイッパイアッテナを助けるため、ルドルフがどうするのか、ここはぜひ読んでみてもらいたいですね。

Ａ：確かにそこは名場面でした。読んでいるこちらもドキドキしましたね。

Ｂ：絵本にも映画にもなった名作中の名作です。

猫たちが活躍する素敵な物語。ぜひ読んでみてください。

Ａ：あ、猫といえば。

Ｂ：どうしたんですか？

Ａ：僕も最近、猫と喧嘩しまして。

魚屋で魚を買ったら、野良猫にとられたんで素足で追いかけました。

Ｂ：いや、それサザエさんやないかい。

Ａ：どうもありがとうございました。

＜この本の紹介について＞

この『ルドルフとイッパイアッテナ』は、児童文学の本でこれまで子どもたちに広く読まれてきた。この物語の最初で面白いのは、やはり「イッパイアッテナ」という名前の表現であろう。今回の紹介では、このあたりのことをとてもうまく紹介しているように思える。二人のおはなしのテンポもよく、いわゆる「ボケ」と「ツッコミ」などをうまく活用して笑いを演出している。また紹介している二人の話し方や表情にもユニークさが窺え、実際の漫談を聞いてい

るような感じがした。あちこちに笑いの要素をちりばめながら、肝心なストーリーの骨組みはしっかりしているところがとてもよかった。

（3）実践例Ⅲ：『君の膵臓をたべたい』住野よる　作、双葉社[11)]

A：今回紹介する本は、『君の膵臓をたべたい』という本です。2015年に双葉社から発行されました。この作品は、2017年7月に小栗旬や北川景子が出演し、実写化された映画が公開されました。2018年にはアニメでの映画も公開されるとか…。

B：膵臓をたべたいってすごいタイトルですね。じゃあ、他にも心臓をたべたいとか、肝臓をたべたいという作品も作っているのですか？

A：いやいや。この作品の著者、住野よるさんは、『君の膵臓をたべたい』がデビュー作なんですよ。

B：そうなんですね。こんな変なタイトルをつける著者って一体どんな人なんですか？

A：じゃあ、住野よるさんについてもう少し詳しく紹介しますね。住野さんは中学三年のときから執筆活動を開始しました。当初は、ライトノベル風の作品を書いて賞に応募していましたが、なかなか受賞できず、賞を取るには別のテイストがいいのではと思い、書いたのが『君の膵臓をたべたい』でした。

B：小説家への道はなかなか長かったんですね。苦労したんだ。他にはどんな作品を書いているのですか？

A：主な作品としては、『よるのばけもの』や『また、同じ夢を見ていた』などがあります。

B：『よるのばけもの』なんて、あなたみたいですね。

A：なんでやねん！

B：他の作品は臓器シリーズではないのですね。（笑）ところで、『君の膵臓をたべたい』というお話は主人公が膵臓の病気で、臓器を提供してもらう話だと思っているのですが…。

A：いやいや、医療系の話ではありませんよ。青春小説なんです。

B：え !!、青春小説なんですか !!

　青春小説なのに膵臓をたべたいってどういうことですか？

A：そもそも膵臓をたべたいというのは臓器提供をする意味で言っているのではないんです。この作品での膵臓をたべたいという意味は、昔の人はどこか悪いところがあると、他の動物のその部分を食べることにより、病気が治ると信じられていたんです。例えば、心臓が悪いと、牛の心臓を食べると良くなるということのように…。

B：なるほど…。そんなに深い意味があったのですね。心にぐっとささりました。

A：本当ですか？　まだ、なんにもお話を知らないのに？

B：どうせ、青春小説だから女の子と男の子の話でしょ。

A：そうです。このお話は、図書委員の主人公僕と膵臓の病気を持った女の子が登場します。女の子がつけている日記「共病文庫」を病院にたまたま来た主人公僕は見つけます。見つけたことにより、偶然にも女の子が膵臓の病気で余命１年あまりであることを知ります。

B：主人公の僕はこの作品のキーパーソンなんですね。

A：女の子の病気の秘密を知った主人公の僕は、女の子の死ぬ前にやりたいことを成し遂げていきます。

B：ちなみにこの主人公の僕と女の子って付き合うんですか？（笑）

A：えーと、それは本を読んでみてくださいね。そこを言っては面白くないですから。

B：え～ !!、それは気になるなあ～。

　そもそも、なんでこんな恐ろしいようなタイトルの本を読もうと思ったのですか？

A：私も友達の紹介で、はじめタイトルを聞いたときは変なタイトルだなと思ったけれど、君の膵臓をたべたいというタイトルにはどんな意味があるのか知りたくなって読み始めたんです。実際に読んでみると、タイトルからは想像できないくらい奥の深い話で、Ｂさんにもぜひ一回は読んでほしいと思います。

B：やっぱりタイトルが気になったのですね。そんなにオススメするなら一回読んでみようかな〜。

ちなみに、Aさんは心に残った場面はどこですか？

A：心に残ったところは、「死に直面してよかったことといえば、それだね。毎日、生きてるって思って生きるようになった」(p.56)です。この文を読んだとき、生きていることは当たり前のことではないなと心に染みました。

B：そんなに深い名言があるのですね。さらに読みたくなりました。

A：是非、本だけでなく映画も見てみてくださいね！

B：そういえば私、最近肝臓が痛いんですよね…。

A：え！　それは大丈夫ですか？

B：わからないです。なので、私も飼い犬の肝臓をたべようかなと思いまして…。

A：何を言ってるんですか。それなら速やかに病院へ行ってください。(笑)

AB：どうもありがとうございました。

＜この本の紹介について＞

この本はベストセラーにもなった本であるから、ほとんどの人が知っていた。でも実際には読んでいない人も多く、あらためてあらすじを聞きながら、本の中身を知ったという人が多かったようだ。

本のタイトルである『君の膵臓をたべたい』という書名をどうして住野よるさんがつけたかが最初の大きな焦点であると思われる。そのあたりのビブリオトークはとても上手に行われていた。内容的に奥の深いところにまでは紹介が十分には行われていないが、少なくともこの本の焦点になるようなところをクローズアップできているのは確かである。最後はそれなりの「落ち」で納めているところが面白い。

（4）実践例Ⅳ：『君の名は。』新海誠　作、角川書店[12)]

B：今日、大学の帰りにディズニー行く？

あ、でもマルキューで買い物もいいなぁ。

A：ちょっとどうしたの？　ここは神戸だよ？
　今から東京行くなんて無理やわ。
B：はぁ…。東京にいたら何でもあって楽しいだろうなぁ。
　「来世は東京のイケメン男子にしてくださーーーーい !!!!!」
A：ん？　なんか聞いたことあるようなセリフ…。
A：今回紹介する本は、全世界で有名になり、日本でも爆発的ヒットを遂げた『君の名は。』という本です。この本の著者はみなさんご存知の新海誠氏です。
B：新海誠さんの出身地、知ってる？
A：どこやろう…、東京とか？
B：ブブー！　実はね…深海です！
A：魚やないかい！　どこなんよ？
B：ホントは長野県出身なんだよー。自然豊かな場所で育ったんだろうね。
A：新海誠さんの作品といえば『秒速 5 センチメートル』とか『言の葉の庭』とか、他にもたくさん有名な作品があるんやで。
B：私も秒速 5 センチで歩きたいと思ったことあるよ！
A：いや、そんなん無理やから。なんでこの本を選んだの？
B：単純に映画見たけど 1 回見ただけじゃよくわからなくて…、小説読んだ方が理解できるかなって。
A：ありがちの理由やね（笑）。
B：まあ選んだ理由はともかく、さっそく本の紹介をしていこう。
A：この本の内容は大きく言うと、人と人が入れ替わるんやって。
B：そうそう！　こんなふうに。（立ち位置を変える）
A：ちがうやん！　とりあえず映画は見たんやろ？　ちゃうやん！
　変わるのは、中身！
B：えぇぇ、え…!!
　中身変わるって、それ一大事じゃん！
A：しかもしかも！　私たちが変わったら女子同士だけど、『君の名は。』では男女が入れ変わるんやで。

B：えええ！　じゃあ私も大好きな千葉雄大さんと入れ替わってあんな女優や、こんな女優と…。

A：何を考えてるの（ドン引きの目）。不謹慎な！

B：あ、すみません。

A：『君の名は。』では、入れ替わって世界を救うんやって!!

B：世界って大げさすぎ！　これは私もしっかり覚えとるよ！

　世界じゃあなくてね、ある日本のどこか地域？を救うんよ！

A：糸守町ね。

B：そうそう、糸守町!!　すっごくド田舎だよねー。

　コンビニが24時間じゃないなんてありえない！　しかも本屋もないんだよ！「進撃の巨人」の最新巻読めないじゃん！

A：まさかの進撃の巨人でてきた。（笑）

A：まぁそんな田舎に住んでる宮水三葉と、東京に住んでる立花瀧がある日を境に中身だけが入れ替わってしまうんよ。

B：怖いねー、ミステリーね…。

　でも東京に憧れてた三葉はラッキーだったんじゃない？　私も入れ替わってみたいなー、東京のイケメン男子と…。あんなことやこんなことを…。

A：はいはい。妄想はストップ。三葉も最初は楽しい夢だなーって思ってたんだけど、だんだん不思議に思えてきたみたい。

B：瀧くんもそうなんだよね。

A：で、入れ替わりが何日か経った時に急に入れ替わることができなくなったんやって。

B：え！　なんで！　どうして！　ホラー?!

A：映画見たんやろー？　なら覚えてるはず！

　何かが落ちた時に入れ替わりがパタリと終わったんやって。

B：あ！　思い出した！　あれね！

A：じゃ、同時に言おう！　せーの！

　彗星!!

B：流れ星!!

A B：えーーーー!!!

A：Bさん、流れ星ってそんな夢みたいな言い方やけど、ちゃうで。

B：うそじゃん！　だってキラキラなんか、なんか輝くじゃん！

A：うんうん、映画も見たし、本を読んだんやろ？

B：もちろん！　本読んだよ！　映画でもキラキラ流れ星がーって。

A：本も読んだんやったら、彗星って漢字を大量に目にしたはずやけど…。

B：あー！　あの私が読めんかった漢字、彗星（すいせい）っていうんじゃね。わたしの大好きなHey! Say! JUMPの伊野尾慧の慧に似とったけん、テッキリ慧くんのことをべた褒めしとるんかと…。

A：Bさん、流れ星みたいにお星様キラキラ〜しとるのは、Bさんの頭の中やね。

B：とにかく！　男女が入れ替わって糸守町を救う！　そういう話なんよね!!!

A：強引にまとめたね。だいたいは合ってるかな。

糸守町に住む三葉と東京に住む瀧くんが入れ替わった理由はなんなのか！糸守町を救うって、本当にそんなことできるの？

B：映画は画がきれいだなーって思っただけだったけど、もっともっと深く自分で考えたりできるのが本だよね！

A：では、最後に私からこの本のオススメしたいところをひとつ。

B：よ！　待ってました！

A：合いの手はいらん（笑）

三葉のおばあちゃん一葉が言っていたことで次の言葉が印象に残っているよ。（p.86－p.87）

「三葉、四葉」

背中で婆ちゃんがゆったりとした声を出す。

「ムスビって知っとる？」

「ムスビ？」

俺のリュックを腹に抱えた四葉が、隣で訊き返す。木々の隙間の眼下に

は、丸い湖の全体が見えている。ずいぶん高く登ってきたのだ。婆ちゃんを背負って登り続けて、三葉(おれ)の体は汗だくだ。

「土地の氏神(うじがみ)さまのことをな、古い言葉で産霊(むすび)って呼ぶんやさ。この言葉には、いくつもの深いふかーい意味がある」

神さま？　唐突になんの話だ？　でも、まんが日本昔話みたいな婆ちゃんの声には不思議な説得力がある。知っとるかい？　とふたたび婆ちゃんは言う。

「糸を繋(つな)げることもムスビ、人を繋げることもムスビ、時間が流れることもムスビ、ぜんぶ、同じ言葉を使う。それは神さまの呼び名であり、神さまの力や。ワシらの作る組紐(くみひも)も、神さまの技、時間の流れそのものを顕(あらわ)しとる」

B：ん…。なんか難しいね…。

ここがオススメしたいところなの？

A：そう。むすびっていろんなむすびがあるねん。私も最初映画見た時はなんのこっちゃ、って思ったけど、本を読んで三葉と瀧くんの出会いもむすびと関係があるんだって気づいたよ。

B：私も理解したい！　よし！　もう１回読もう！

A：映画見た人も、見てない人も、本を読んでみてね！

B：ぜひぜひ！

以上で本の紹介をおわります。

紹介したのはわたしとＡさんでした。

ＡＢ：え!?　私たち入れ替わってる!?　そんなあほな！

ありがとうございました！

＜この本の紹介について＞

この本はベストセラーになり、また映画化もされたからほとんどの人が知っている作品である。そういう意味では、逆に本の紹介が難しい側面がある。この本のビブリオトークは、細かい描写にも触れながら、二人のやり取りも軽快

に行われている。関西弁特有のかけあいがとても面白く、まったく飽きない時間であった。終始、笑いながら聞いていた。ところどころには、くすっと笑えるような工夫をしながら、話を展開している。しかも、要所要所に「ボケ」と「ツッコミ」も入れながら楽しいビブリオトークになっている。最後の「落ち」は、この本らしい工夫がされていると感心した。

（5）実践例Ⅴ：『星の王子さま』アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ作、岩波書店[13)]

A：この本知ってる？

B：あぁ、星の王子さま！　有名なやつやん！　それなんかで聞いたことあるな？

A：そう！　私は『君の膵臓を食べたい』っていう本を読んだときに話の中に出てきて知ってん。その主人公がこの本をすっごい大事にしてて、私読んだことなかったからずっと気になってたんよ！

B：へぇ〜、面白かったん？

A：すっごい面白かったで！　ただ、私が想像してたものとは違うかってんけどな。

B：あ、そうなんや！　どんな話なん？

A：これはな、サン＝テグジュペリっていうパイロットが書いたんやで！

B：いや、誰やねん！

A：えっとな、サン＝テグジュペリさんはな、名門の貴族出身やねん！

B：はぁ〜。

A：そのサンさんがな…。

B：急にフレンドリーなったな！？

A：まぁ、良いやん。でな、その人が親友のレオン・ウェルトっていう人に自分の形見として書いたものらしいねん。

B：あ、そんな深いんや！　じゃあ、そのレオンさんが主人公なん？

A：いや、ちゃうねん！　レオンさんは出てこうへんねん！　主人公は、ぼく、

サンさんな。と、全く関係ない星の王子さまが出てくるねん。ぼくはパイロットで、サハラ砂漠に不時着した時に星の王子さまと出会うねん。そこで、星の王子さまからいきなり羊の絵を書いてってお願いされるんよ。

B：え、なんで羊？　そもそも星の王子さまって誰？

A：羊のことは本に書いてないねん。でも、星の王子さまは一戸建てぐらいの大きさの小惑星、B-612番の王子さまやねん。

B：それ、どこ!?　え、なんで地球にその王子さまがおるん？　自分の星持ってるんやろ？

A：うん、そうやねんけど、なんかバラと喧嘩したらしい。

B：え、バラ？

A：うん、バラ。ま、なんでなんかは読んだらわかるわ。

B：え、なにそれ。気になるわ〜！

A：そんで、王子さまは地球にやって来るねんけど、その前にも6つの星を周ってきてるねん。

B：へぇ〜旅行やん！　え、待って、その王子さまは地球に住むん？

A：ううん、バラと喧嘩して自分の星を捨てて来てんけど、最後はバラのもとに戻るねん。それは地球で、すぅっーごい大事なことに気づいたかららしいで。

B：へぇ〜そうなん。その大事なことって何なん？

A：あ、それは言えんかなぁ〜。

B：なんやねん、ケチやな！

A：まぁ、読んだ人によって感じることも違うから、B子ちゃんも読んだら、すぅっーごい大事なことに気づくかもよ？

B：おぉ〜、良いこと言うやん！　ちょっと読んでみたくなったわ。

A：あ、じゃあおすすめのところをちょっとだけ教えるわね！　星の王子さまが僕と出会う前にキツネと出会うねんけど。

B：うんうん。

A：王子さまが、キツネに友達になってって言うねん。でもキツネは断るねん。

その理由としてキツネがこんなこと言うねん。よう聞いとってや？（p.118）

「うん、そうだとも。おれの目から見ると、あんたは、まだ、いまじゃ、ほかの十万もの男の子と、べつに変わりない男の子なのさ。だから、おれは、あんたがいなくなっていいんだ。あんたもやっぱり、おれがいなくなったっていいんだ。あんたの目から見ると、おれは、十万ものキツネとおんなじなんだ。だけど、あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになるんだよ……。」

とキツネが言ったんよ〜。

B：ほぉ〜、なるほどなぁ。もっと知りたくなってきたわ…。

A：やろ〜、深い話やねんで。

B：深い〜、やな！

A：しょうもな。

B：え、つめた…。

A：あ、そうそう冷たいといえば、星の王子さまって、グッズにもなってるんやで！

B：いや、つながってないし！　あ、でも友達がスケジュール帳持ってたわ！あと、トートバッグとか傘とかもあるらしいな。

A：あ、それは知らんかったわ。

B：ちなみに〜、トートバッグは4,200円やで。どう？

A：あ〜、う〜ん。ちょっとお高めなんやな。

A：なんでそんな話になるのよ！

B：そうやな〜まぁ、また読んでみるわ！

A：うん、読んでみて〜！

＜この本の紹介について＞

この本は昔から世界中の人に読み継がれてきた本で、あまりにも有名である。しかし、本のタイトルは知っていても読んでいない人がかなりいることも驚きである。このビブリオトークは関西弁丸出しで、おはなしが軽快に飛び交っているのが特徴である。あちこちに笑いの要素を入れながらも、この本の大切な部分や核心にもふれているのがよい。

最後の「落ち」はもう少し工夫しても良かったかなと思えるが、全体的にはとてもおもしろく、興味深いビブリオトークであった。

3 「ビブリオ漫談」の今後の課題と可能性について

「ビブリオ漫談」はまだ実践を始めたばかりであるが、当初予定していた以上に学生の反応も上々で、先生を志望している学生は、教員になったらぜひ子どもたちにこの「ビブリオ漫談」を実践したいと述べていた。

「ビブリオ漫談」は昨年２回の実践であったが、これからはもう少しやり方を工夫し、誰でもできるような方法で、「ビブリオ漫談」ができるようになれば、さらにこの実践が広がっていくと思われる。

この「ビブリオ漫談」は二人でやるのがもっともやりやすいのだが、１人でも「ビブリオ漫談」ができるような形式を考えて行けば、もっとやりやすく、しかも面白くなるのだろうと予想される。１人で漫談をやるには、自分でボケとツッコミをやったり、笑わせる要素をよほど吟味して話したりする必要があると考えられる。

今後、１人の「ビブリオ漫談」も実践し、その実践の可能性について深めていきたい。

おわりに

今回、「ビブリオ漫談」について原稿をまとめることができ、この実践を学校や図書館での読書活動へとひろく広げていきたいと考えている。そのことで読書は「楽しい」というキーワードを、この実践を通してさらに深めていける

のではないかと考えている。また、何よりもこれまでに読書への入り口の敷居が高かった子どもたちにも、この「ビブリオ漫談」は新たな読書嫌いへの読書技法へとつながっていくと信じている。

このような実践は、数年前より大阪市立中央図書館が「書評漫談」という形式で毎年実践しているが、その実践にすごく感化されたのも事実である。さらに、今まで私が開発して来たビブリオトークの技法に、この「ビブリオ漫談」の手法を採り入れて幅広いビブリオトークの実践につなげていきたい。

参考・引用文献

1）『グループでもできる　ビブリオトーク』笹倉剛　作、あいり出版、2015、p.11
2）『テーマ別のビブリオトーク』笹倉剛　作、あいり出版、2016
3）『岩波少年文庫のビブリオトーク』笹倉剛　作、あいり出版、2016
4）『読み聞かせを活用したビブリオトーク』笹倉剛　作、あいり出版、2017
5）『ビブリオクイズ』笹倉剛　作、あいり出版、2018
6）矢島伸男、「『笑い』の教育的意義　－『ユーモア・センス』の概念を中心に－」創価大学大学院紀要 34、2012、p.288
7）『ユーモアの心理学』アブナー・ジップ　作、高下保幸　訳、大修館書店、1995、序文Ⅷ
8）『笑い』ベルグソン　作、林達夫　訳、岩波書店、1938、pp.20-21
9）『残像に口紅を』筒井康隆　作、中央公論社、1989
10）『ルドルフとイッパイアッテナ』斉藤洋　作、講談社、1987
11）『君の膵臓をたべたい』住野よる　作、双葉社、2015
12）『君の名は。』新海誠　作、角川書店、2016
13）『星の王子さま』サン＝テグジュペリ　作、内藤濯　訳、岩波書店、1953